

2026年度大学院入試（11月期）（発達心理学専攻・発達臨床心理学コース）

博士課程（前期） 「専門科目」

（2025年11月1日実施）

合否判定の方法 《専門科目》《英語》《口述試験》

専門科目（200点）、英語（100点）および口述試験（4段階評価）により評価する。

合否判定の基準 専門科目：100点以上、英語：50点以上、口述試験：C以上のいずれも満たすこと。

《専門科目》（200点満点）**【1】**

出題意図

心理士の基本的な面接態度についての知識の有無を問うものである。

正答例

臨床心理士やカウンセラーがクライアントと面接を行う際、適切な面接態度を持つことは、クライアントの安心感や信頼感の醸成、問題解決への意欲向上に不可欠である。以下に、特に重要とされる面接態度を5つ以上挙げ、それぞれを説明する。

1) 受容

クライアントの話や感情、価値観を否定せず、そのまま受け入れる姿勢である。たとえ自分の価値観と異なっても、批判や評価を避け、クライアントが安心して話せる雰囲気を作る。受容的な態度は、クライアントの自己開示を促進し、面接の効果を高める。

2) 共感

クライアントの立場や感情を理解し、言葉や態度で共感を伝えることで、クライアントは理解されたと感じ、信頼関係が深まる。

3) 誠実さ・真摯さ

クライアントに対して誠実であることは、信頼関係の基礎です。表面的な対応やごまかしをせず、真摯に向き合うことで、クライアントは自分の問題に真剣に取り組んでもらえていると感じ、安心して面接を続けることができる。

4) 中立性（非審判的態度）

クライアントの言動や価値観を、善悪や道徳的正否で判断しない。判断的な態度は、クライアントの防御的な反応や自己開示の妨げになります。中立的な姿勢は、クライアントが自由に話しやすい環境を作る。

5) 秘密保持

クライアントが話した内容を第三者に漏らさないことを約束しなければならない。秘密保持の姿勢は、クライアントが安心して本音を話せる大前提となる。必要に応じて、特に思春期の若者には、面接開始時に秘密保持について明確に説明することが重要である。

6) 傾聴

クライアントの話を注意深く聴き、適切な相槌や要約、質問などを通して傾聴しているという姿勢を示すことである。傾聴は、クライアントの自己理解を助け、面接の進行を円滑にする。

7) 安易なアドバイスの禁止

安易にアドバイスをする、クライアントは葛藤をこころに維持することができなくなり、面接が現実的なことを解決だけの場となり、内省の機会が失われる。

8) 診たてる（アセスメント）

傾聴や受容だけでは、専門職としては十分に機能しているとは言えない。クライアントの訴えはどのようなことから形成されたのか、どのような無意識的な機序が働いているのかを思慮することが、最も重要なことである。

まとめ

臨床心理の面接では、受容、共感、誠実さ、非審判的態度、秘密保持、積極的傾聴、安易なアドバイスの禁止などの面接態度が極めて重要である。これらの態度を意識し、実践することで、クライアントとの信頼関係を深め、より効果的な心理支援が可能となる。特に診たてることが重要であり、これは専門家としての必須の態度である。

【2】

出題意図

精神分析の概念は個人だけでなく、社会という集団にも応用できることについての理解を問うものである。

正答例

「抑圧」(repression)は、フロイトが重視した精神分析理論における基本的な防衛機制の一つである。人が苦痛や不安、葛藤を引き起こすような思考や感情、記憶などを無意識下に押し込み、意識から排除する働きです。抑圧された内容は、意識的には思い出せなくなりますが、夢や錯誤行為、症状などを通して現れる。

具体例として、意識において置けない情緒は無意識に押し込められ、夢で表現されたりする。また、フロイトのヒステリーの患者のように性欲の抑圧により失声などの身体症状を呈する。日常生活では、幼少期に親からの虐待経験がある人が、その記憶を想起すると強い不安や怒りを感じるため、その記憶自体を無意識に封じ込めることがある。しかし、大人になって権威的な人との関係でその関係が再現され、強い緊張や不安を感じ、突発的に怒りを爆発させるなどの形で、その抑圧された感情が現れる場合がある。

「投影同一化」(projective identification)は、主にクライン派の精神分析で重視される防衛機制である。自我が未熟な乳幼児では自分の中にある受け入れがたい感情や衝動を、母親、に「投影」し、包容される。このプロセスが「投影同一化」の基本である。

病的な例では、ある職場で、上司が自分の中の不安や無力感を認めたくないために、それを部下に「投影」する。部下への叱責を繰り返し、部下自身が本当に自信を失い、萎縮し、結果として上司の投影した「無能な人間」を演じるようになってしまう。こうして、上司の内面の感情が部下の行動を通じて現実化するのが「投影同一化」である。

戦後日本社会は、敗戦という体験を経て大きな変化を遂げた。これは抑圧という「欲しがりません、勝つまでは」といった心性、我慢によって為し遂げられた。その一方、個人や社会が直面した喪失感、屈辱、罪悪感などの複雑な感情は、しばしば「抑圧」されてきたと考えられる。抑圧された感情は、個人レベルだけでなく、社会的な現象としても現れる。たとえば、戦後の日本社会において、外部からの批判や異質なものへの排除的態度などが見られた。

その後、社会は安定し、豊かになり、我慢することから、「発散」する文化となった。自己主張が重視され、沈黙は愚かさの象徴となった。さらに「投影同一化」のプロセスを通じて、他者に「脅威」や「悪意」を見出し、被害感、ハラスメントなど他罰文化が展開することになった。排他的保守主義の流行りはこうした心性に起因しているのであろう。

現代においても、社会の分断や排他的な言説、インターネット上での攻撃的なコミュニケーションなどには、抑圧という我慢の時代ではなく、他者に発散、つまり投影され、「投影同一化」によって現実化する構造が見られる。つまり、「自分の中の不安や弱さ」を認めることができないために、それを他者に投影し、他者が「攻撃的」や「問題のある存在」として扱われ、それが現実の対立や分断を生む。

「抑圧」と「投影同一化」は、個人の心の働きであると同時に、社会的な現象としても現れます。戦後から現代に至る日本社会の心性を考える上で、これらの概念は、個人と社会がどのように過去の痛みや不安と向き合い、それをいかにして他者や集団との関係性の中で再現してきたかを理解する手がかりとなる。

【3】

出題意図

発達障害のある子どもの発達過程と早期支援の意義を理解したうえで、発達心理学および臨床心理学の研究・実践に必要な基礎知識、論理的思考力、表現力を判定すること。

正答例

発達障害を抱える子どもへの早期介入は、子どもの発達を適応的な方向へ促し、長期的な不適応を予防するうえで重要である。発達障害とは、自閉スペクトラム症（ASD）、注意欠如・多動症（ADHD）、知的発達症（ID）、学習障害（LD）など、神経発達の特性に起因して、行動、社会性、認知、情動調整などに困難を示す状態をいう。これらの特性は乳幼児期から現れることが多いが、症状や困難の表れ方は発達段階や環境によって変化する。そのため、子どもの特性だけでなく、家庭・学校・地域などの環境との相互作用を踏まえて理解する必要がある。

早期介入が重要である理由は、乳幼児期には神経可塑性が高く、環境的刺激、社会的相互作用、言語発達にとって重要な時期だからである。早期から適切な知識や支援を提供することで、子どもに合わない期待水準や不要な失敗体験の蓄積を避けることができる。また、コミュニケーション能力、信頼関係、自己調整機能を育てることは、その後の学習や対人関係の基盤形成につながる。早期介入の目的は、困難さを軽減することだけではなく、子どもに合った適応的な発達経路を促進することにある。

具体的な介入として、ASDではABAやTEACCHなどで社会的関心や親子関係の質を高める支援や日常場面で社会的コミュニケーションを促す自然的発達行動介入などが行われる。ADHDでは行動療法的支

援やペアレントトレーニングにより、問題行動の軽減や家庭機能の改善を図る。LDでは、読み書きの困難に早期から対応することで、学習意欲や学業成績の低下を防ぐ。また、SSTなどを通して対人関係や社会的スキルを育てることも重要である。

また、早期介入は長期的にも大きな意味をもつ。適切な支援により、学業、就労、精神的健康、社会的適応に良い影響が期待できる。また、抑うつ、不安、行動障害などの二次障害を予防するという点においても重要である。支援が遅れると、失敗体験や周囲との不適合、養育者のストレスが積み重なり、不登校、家族関係の悪化、二次障害、将来的な就労困難などのリスクが高まり、成人期まで影響が及ぶ可能性がある。したがって、発達段階を通じて継続的に支援する視点が必要である。

さらに、早期介入では家族支援も重要である。心理教育やペアレントトレーニングは、保護者が子どもの特性を理解し、適切に関わるための助けとなり、長期的な安定や支援の継続に寄与する。また、教育現場では合理的配慮を実現し、子どもが学習や集団生活に参加しやすい環境を整える必要がある。

一方で、早期介入は単に早ければよいというものではない。診断の早期化には、ラベリング、支援効果への過度な期待、本人の自己理解や自己評価への影響といったリスクもある。そのため、介入は子どもの特性や発達段階に応じて個別化され、質の高い支援として継続される必要がある。また、発達の多様性を尊重し、子どもを一方的に標準的な発達に近づけることだけを目的化せず、家庭・学校・地域・多職種が連携して、社会的適応や参加を支えることが重要である。

以上より、発達障害を抱える子どもへの早期介入は、現在の困難を軽減するだけでなく、将来の学業、対人関係、精神的健康、就労、社会参加にまで影響する重要な支援である。ただし、早期介入を万能視するのではなく、発達の多様性を踏まえ、個別化された継続的支援として行うことが求められる。

【4】

出題意図

応用行動分析（ABA）に関する基本用語を用いながら、支援との関連を論理的に説明できるかを問うものである。

正答例

(1) 応用行動分析（ABA）は、人の行動が環境との相互作用によって形成・維持されるという考え方に基づいて、行動を理解し、望ましい行動を増やすための方法を提供する理論体系である。その核となる概念が行動の三項随伴性である。弁別刺激（または先行事象）（A：どういった状況で）－行動（B：どのような行動が起こり）－強化刺激（または結果事象）（C：どのような結果が伴ったか、どのように環境が変化したか）、という3つの枠組みで行動を捉えることを三項随伴性という。

(2) 「強化」とは、ある行動の直後に起こる結果によって、その行動の頻度が高まることである。たとえば、正の強化はその人にとって好ましい刺激を加えることで、行動が増えた場合、正の強化がなされたとする。それに対して、負の強化は不快な刺激を取り除いたり避けたりすることによって、行動が増えた場合を指す。

「弱化」は、行動の直後に好ましくない結果が起こるか、強化が取り除かれることで、行動の頻度が下がる場合を指す。強化と弱化の違いは、行動を「増やす」か「減らす」かにある。

(3) ABAは、特別支援教育や療育の現場で幅広く活用されている。たとえば、自閉スペクトラム症の子どもが適切な方法で要求を伝えられるようにする支援では、正しく伝えたときに強化子（欲しい物など）を与えることで、その行動の頻度を高める。また、例えば自傷行動といったいわゆる「問題行動」の機能を分析し、その機能と同じより適切な代替行動を教えることも行われている。

(4) 私がABAで特に重要だと思うのは、支援が「観察とデータに基づいて行われる」点である。対象者の行動を主観で評価するのではなく、実際の行動頻度を記録し、変化をもとに支援方法を調整していく。このような科学的アプローチにより、教育・療育の現場での信頼性と納得性が高まると考える。